

ない傾向が見られ、実用的な散布間隔は、レバー位置 No. 5 では 3~3.5m, No. 4 では 2.5~3m, No. 2・No. 3 では 2~2.5m の範囲が適当であると思われた。

3. 牽引抵抗は 380kg であり、トラクターの牽引力から見て軽作業である。

飼料カブの生育相からみた 栽培技術的要因の解明

大 沼 寿太郎・阿 部 武

(山形県農試最上分場)

当地方における乳牛に対する飼料構成を検討してみると、冬期積雪期間中の飼料を如何にするかということ、すなわち冬期間の貯蔵飼料の生産増大・確保ということが極めて重要な問題となっている。

本研究はこれ等貯蔵飼料の中でも重要なウエイトを占めている飼料カブにつき、地上部及び抜き取りした地下部の調査からその生育のステージを明らかにし、茎葉の繁茂と根部肥大に関係する要因を見出し、耕種設計上の資料にしようとするねらいを以て実施したものであるが、その概要は次の通りである。

1. 調査の概要

1. 供試品種 当場にて育成中の仮称「豊里カブ」
2. 播種期 8月15日
3. 栽植密度 畦巾60cm, 株間30cm
4. 調査月日 8月25日・9月5日・9月15日・9月25日・10月5日・10月15日・10月25日
11月5日・11月25日・12月5日
5. 調査項目
地上部：草丈・葉数・葉巾・葉重
地下部：根長・根径・根数・根重
6. 調査方法 調査個体は3ブロック別に調査月日毎15株宛選定し、この中より大・中・小に抽出調査した。

2. 調査結果の概要

各調査項目別の生育経過はおおよそ次の通りである。

1. 草 丈

播種後9月末頃迄は急激に伸長したが、その後11月中旬迄の伸長はほとんど見られず漸次低下した。これは気温の低下に伴って多くなる古葉の落葉によるものと見ら

れる(第1表)。

2. 葉 数

おおよそ草丈の伸長と同様の傾向が見られるが、ただ草丈より若干早く、11月上旬頃より少なくなってきた。これは10月上旬頃より見られた枯葉が11月5日頃より落葉を開始したためと見られる(第1図)。

3. 根 長

9月下旬頃迄の生長は比較的早いですが、その後緩慢ながら11月中旬頃迄生長を続けるようである。これは調査場の欠陥があり生長が充分でなかったためではないかと思われる(第2表)。

4. 根 径

この調査では収穫期迄漸次太さが増してきている(第2図)。

5. 根 数

9月15日迄は急激に増え、10月中旬頃迄若干の増加を見せるが、その後はほとんど変わらない(第2図)。

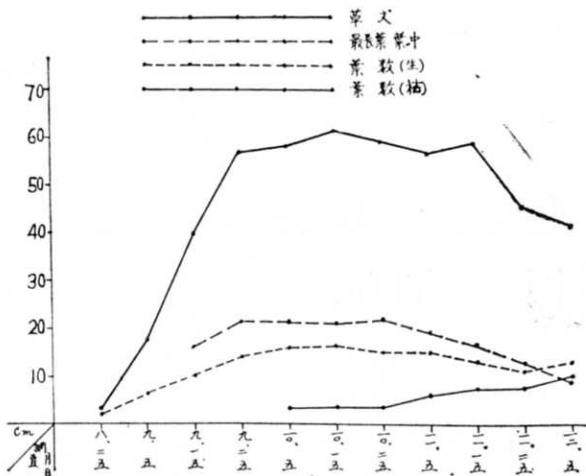
6. 葉 重

9月下旬迄急激に増加し、その後10月下旬より11月上旬頃迄は、ほとんど変わらず進行し、以後急激に減少する。9月下旬から11月上旬頃迄の増減を大・中・小別に検討してみると、株肥大の大きなもの程、葉重も重く、且つ遅い時期迄肥大し、小さい株の葉重は軽く且つ早目に軽くなっている。しかし大・中・小を問わず収穫時の葉重はほとんど変わらない(第3図)。

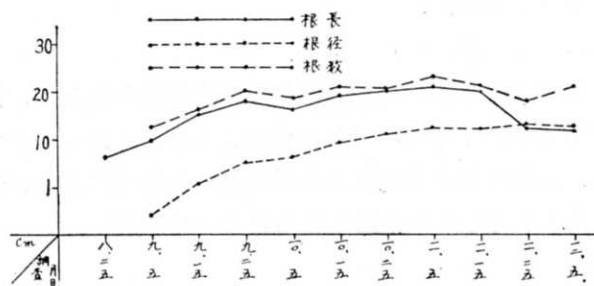
7. 根 重

葉重と違って収穫期迄肥大を続ける。特に9月末頃迄の肥大は急激であることが認められる。これを大・中・小別に検討してみると、11月5日迄の増加は著しいが、その後は比較的緩慢であるのに反し、中及び小の株は収穫時迄肥大を続けるためか、根重は増加の一途を辿る

(第3表)。



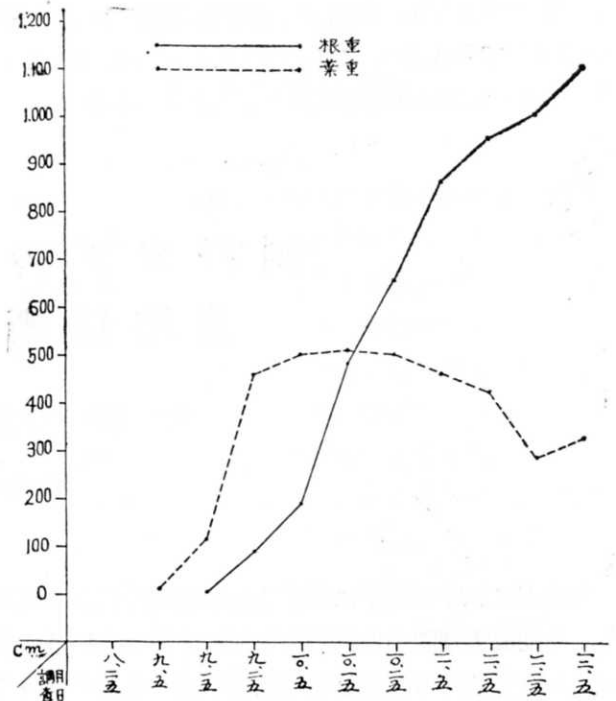
第1図. 時期別の地上部生育(大・中・小平均)



第2図. 時期別地下部の生育(大・中・小別)

3. 総 括

以上の調査結果を総括すると、先ず播種してから9月末頃迄の地上部は草丈・葉数ともに急激に増えるが、10月上旬頃から葉が枯れ始め、11月に入って落葉するため葉の数は逆に減ってくる。根の長さもやはり9月末頃迄はよく伸び、その後僅かではあるが11月上旬頃迄伸び続ける。根径は収穫期頃迄太さが増し、根数とその伸び方も同様の傾向が見られる。また葉重は9月下旬迄は急激に増加するが、10月下旬頃より、11月上旬頃迄はほとんど変わらず経過し、その後は枯葉・黄葉が出るので逆に減ってくる。次に根重について見ると9月末迄の肥大量は多いが、その後は緩慢な肥大の様相で収穫期迄続行す

第3図. 10a 当り時期別葉重・根重
(大・中・小平均)

る。

このような生育状態から見ると、地上部は播種後9月末頃迄は、かなりの増大を見せるが、その後そのままの状態が続く、10月に入ってから、生理的な現象により生育量は逆に減ってくる、また地下部の生育肥大は9月末迄は急激に行なわれるが、その後も気温低下に伴う地上部の生理的变化にも変わらず緩慢ではあるがやはり肥大は継続する。

このようなことから生育肥大、すなわち多収収穫を期待する基本条件として考えられることは、地上部の生育を旺盛にし、その繁茂する限界を延長することによって、地下部の肥大をより増大することが期待されるといえる。

いずれにしてもこのような生育のステージをよく知ることによって合理的な耕種改善が行なわれるものと思われる。